春臺獨語

一二三四五合巻

イ 5
347

門 イ 曾
號 347
巻

東京図書館

春臺先生獨語巻之上

太宰純著

東京本郷區大久保餘丁町百拾貳番地 坪内雄藏

老いぬる事いとぬるはらぬことざさと昔の人いひけりしはまことなりさればとて思ふまゝに若き人にかへらるべきにもあらねばいかにも賤しくてめでたき性をもちてひとりごちて後をまつよりほかの事なし

世に和歌を好む人多くあれども和歌のこゝろをしら

明治三十七年十一月五日 坪内雄藏氏寄贈

まる人こゝろかなしも三十一字をはらぬる人ハ多けれど
万葉集古今集に入ほどのうたをよく出来て今
いまさゆうだ家父母とまでに和歌を好しゆゑに八九歳の
時より三十一字を作りぬ・よくべきを知りこ十歳ばかりより
十二三までよみしおもののうた凡三四万首とよめる師も
なくなしかれどもうたよみとなれバとて人にしらする事も
なく世に出て我よりまさるたるのそなりこそ附のんにおい
よくはべきおとのこおりえり十四五歳のよりはじめて

詩といふものを学んで稀に古今絶句などを綴る
まくべきを忘れてそのまゝれつゝなるんひとつに思慕せ
しハ和歌を学びてたとへよそに出うりとて公家の
人くをこもしさ語ばなるもあまりしがいつも公家の下にかくこなん
しかし口惜詩ハ公家の一朝をもうく悔しけれバ上くにまさく
なりなバ公家をそ守るべくしうのこゝちにあきてハ
天下に思ひゐしところなりつゝもいぞうたよむするをと止て
詩作らるゝことを狂ハぬやと思ひ定て書付るゝ和歌の

皇朝をさしおきて楚辞にて一首ものこしとゞめん丈より

詩を好くひさしく学習し数十年を経て漸く詩の

巧をあきらめたり天性不才魯也上手にハなりがたく終に

詩の巧を覚悟したるとハ詩にもまけじと思ふ

古人を以て考ふれバ和歌の巧もあきらかに知られ元

唐土と和歌と風俗同じからざれども詩と歌との巧

ざかり天理全く同じその子細ハ異国も和歌も古も

今も人情ハ変ならざる事詩も歌も人の声音も性情を

吟詠する所ハ唐と大和と詞のかはるのミにて性情を

吟詠する事ハすこしもかはる事なし詩と歌と其頌の

同じきハ此段なり我国も異国も独り人の詞ハ時世に

つれてかはるゆへに詩と歌と時世にしたがひて風體か

はりぬれバ詩も歌も末の世になりて昔にかはる風

體のかはりにて風體のかはるハ其詞のかはるなり此理を

覚悟して能古にさかのぼりて古の風體をしのぶ古の

言葉を我用ひバ今の人にてもいにしへの人にもならぬ

やまとうたは和歌の名にて又からのうたなるべし我和歌を学
びんとは詩の名を以て考ふるに今の世に於て古におとらぬ
歌をもよみ出しても唐詩といはするの雑なるするにあらじ詩を見る
眼にて歌を見れば歌の体も深めもあまりなに見えまさる
万葉集の歌は風雅之漢魏乃古詩までを兼て精く
盛唐の詩をそなへしめる為なり古今集の歌は正しく盛唐
の詩之後撰拾遺の二集にて盛唐に初唐の詩をまじ
へたる歌之後拾遺より新古今迄は中唐晩唐の詩に

宋の詩をまじへたる歌也新勅撰より末つかたには宋
是にまじ和漢の時代を考ふるに我国元正聖武孝謙
の御宇正しく唐の玄宗の開元天宝の時に当るまた
此時吉備公のごとき人々入唐して盛唐の礼
楽文章を学びて帰て我国にひろめし故に和国の
歌は自然と唐詩の風體に似たり仲麿が明州に
てよみたりといふあをうなばらの歌は盛唐の佳境
にて李太白が峨眉山月の詩と同格なるべし定家卿

あまのそらとあらためしハ江州　桓武平城嵯峨の
ときに及ぞハ唐の大暦以後中唐の世に当て唐詩ハ
格調をこしくだりぬれども我国の歌ハ猶代々の盛なり
白楽天が詩ハ唐詩の格悪きなれども白氏文集我
国におこなはれて菅原共是をこのみける
上代より公家の人々皆楽天が詩をおもしろき其
事と思ひて其風調を和歌にうつさせしほどに古今
歌ハ三代集の体を見まもり源平の乱のときまで其

国ハ宋の代にて程氏朱氏の道学興り詩の道おとろふ
我国にも僧家宗家の歌道おこるを見て万葉古今
集の風体衰へて僧家ハ天台の伝法をまなびて
一心三観の理を歌道の極意とせられし其子定家
卿まさし其家訓を伝へられしゆへにやよみ出されし歌
皆理屈にてなぞく我事多かりき其ほども我国同
時に詩歌の道衰へたるハ誠に気運の甚かりしむる
処への悲しき紀貫之凡家王の歌ハ定家卿よりおとろへ

なりとおもふ為家卿ハまさしく定家卿よりハおとりたまへたり
よし然るをそのゝちの人京極家の歌人を尊信して
今の世までもかく守り金科玉條とこゝろうる[illegible]晴
しきと京極の一大厄といふべし今の人京極を讃ほど
さてハ歌道も公家の中にも名家なる人を師として学
ぶ是大なるあやまりく古より惑ひして位高き人にあたり
上手にはなきものにて上手ハいつも卑しき者に出来るゝ
歌の聖にても人麿赤人にまさる人にあれども古今集を

撰びたる人ハ則一人大内記にて下位の官人なりき
貫之ハまさしく其下と見ゆ躬恒ハ甲斐の目忠岑ハ
右衛門の府生なれバ皆地下の卑しき者なりこの輩
ハ歌道に達せし故に撰集の勅をうけたり歌道衰
へしときだに高位の人々ハ達者まれなり況や今の世
歌道衰微の時に公家の高位の人々何として上手
なるべきや和歌に眼なきもの公家の名家にて歌
訓と定めたる人をばかならず上手ぞと思ひて其の

点削批判をうくるハ御目しき事と然て名利を思
しきものにてはまさを當時によしとおもふより公家
の名家の秘密を得て世に弘めんとするものも出
来たるおりふしハ歌道ハ師に伝て学ぶものにハあらずと位く
和歌の古き伝受なさんハ読がたくあぶなければ其事
に深き人に志ざしを得て書をよく見るべし既に書を
よく知る上ハ万葉集より三代までを幾度も通し千遍
よみ歌ハおもふことをえらんぜし詞をえらんでて歌を

温習をしれば自然に風調を得たるなりたとへば古人
諸家の歌学の書をよく読めば諸家を知るべし其上にて
ハ詠をえん自ら對し人情奥麼（こうえん）の事を時々自然
に三十一字をつらね出すべしここに至りて和歌にて三代
の人ハ自然の風俗をもて歌をよみなして師になりかし
学びたる人ハなしさればまづ男（お）の女（め）に
歌をよむ後世にハ風俗を知りて人の言紫にたる
およそ此故に今此人をいなかきて三代集より上つかたの

歌を数千首持らんよりたゞ一つにても好き歌をぞよむべき
なるべし撰集する歌を必人の見るべしとおもはゞ
まして公家の人々に見せて秘蔵せよとて名誉をもとめ
むべきにてもあらねど我こゝろにまかせて趣味風流し
古歌に有ふる筆をも似たるを似するのところと思量
せむ何ぞよしなしの及ばざる事あるへやかくのごとくに
して歌数おほくよまんとするに一首二首古人におとらぬ
歌などのあらん身一生に得まする歌一二首ありそ

人にも秘せずとも不朽にたらぬべし喜撰法師が秘曆
の歌にて名を千載に遺したるを見べし末の世の當時
の人々まちかまへんことを求めも讃するほどの歌を書ま
ることありける人ひとりとしてかゝりし遺したらんに當時に
はもやまた人なくして百年の後に思ひて称揚する人
あらむかしかゝる歌上つきあり凡人の仕们しも貴賤
當時には知る人なくして身の後に世上の論さだまるも
信ずる人は名誉を待人にてありのたも称せらるゝおのが一生の

うらみ人にまさらんとあらそふときハ心おこりて
大事をなしぬる者ハ志の高からぬなし昔虞仲翔ハ
天下に一人我を知る人あらバうらみてたるに足りぬと
いひ孝子ハ我を知るものの希なれバ我たのしむと
いへり時に信をたてゝハほまことを当時に識もるところ
ゆるぬべし和哥の道のこゝろにかゝはりて萬の事皆之に
同じ我詩の道を以て推て哥の道を志るまる事
かくのごとし詩ハ異国の言葉也哥ハ和国乃言葉

なりまことに學びぬれバ甚興ある事也學びやすからね
きと志ぞ立ぬる事ハ言ひがたしまして古乃栗山(りつやま)にゆかりみて
およバ稀なりと口惜しき事なりまして家なる猪ア子遷ハ
和哥の道を志りて後に詩を學び詩の道をさとりて
遂に上手の名をとりしかども今は公家の人々に和學
の以ふ詩の道をときやすからせたくおもふ也けんをはゆる
きところをひらなく和學の詩を學ぬるに和哥こと學
びぬべくなりて古人におよバるべしさしあたり多くの

人の中ニ傑出の人なども出来さん今古家の人々
和歌の道をもよくかくすべき事をおもんばかりして五百
年来定家卿の教へをまもりて道の衰へゆく事を
志らにいこりてなげかしき事也今の士君子人もかは
統を伝受して清きを学び古義を以て和歌を学び
一己(いつこ)の精力まで歌道を悟り上代の歌に似るなくりの
歌をよみをさきたらん身の僅ニ和歌行ひてゐるまで
在あく爾し甚よ起此歌ハ師統絶なく公家の人ニ
学ハ自力ニてよミたりとて咎しめつる事有るな
なり陽春白雪の曲ハ和するもの少く聊し和歌の
事ハあらざれバ是を責むることなし今の人ハたゞ
下里巴人(かりはじん)の曲をうたひて和する者の多きをほま
れとするなく

春臺獨語巻之終

春臺獨語巻弐

太宰純著

我先師徂徠先生いはく異国と我国と風俗大に
人ハ異なるのミにて言語全く異なれとも人情同じきなれ
又いはく和哥ハ人麿赤人の外在原業平をよしと
いふべし伊勢物語に載たる絶妙なる哥多し月やあらぬ
のうたを見侍に行末の感慨をやつくす行の哥ハ古今の
絶唱なり惟喬(これたか)の皇子を訪ひまゐらせて見まゐらせてハ雪

のとかに思ふとよまれし秋のたぐひなるのこゝにおもしろきかれ
家の人言葉のおもしろいふことぞいはれし
毛詩に蕭々馬鳴悠々旆旌といふは軍中の静なり
様をいへり馬のいなゝくと旆の風にひるがへるを見る
のみにて他はいふ事なきところを無量の意をみせて云尽せり
楚詞に嫋々兮秋風洞庭波兮木葉下といへるは
秋風そよ／＼と吹く時洞庭湖に波たち湖辺の木の葉
ちら／＼と落るといへるのみにてあまねくつくしたり

おもしろきはなく去ればこそ此両句を吟詠すれば
洞庭の秋の景色を今も目ぜんにあり／＼とみゆるやうに思はる
又王孫遊兮不帰春艸生兮萋々（悲萋々欲 本に）といへるは全
なつかしむこゝろ限りなき感情なり此等は唐詩の佳境
にて和歌にも又此意あり古のよき歌といふは一首の中に
則耳に聞きて意あれど其意は又人の解説をま
たずして志らるゝなりそのために吟ずる時はさま／＼におもしろき
事は限りなきやうにて飄流和歌は無限興致有り

今の人の哥ハ詞もうつくしくて再三吟じても事をミ
とむれバ則よろしく人の解説をきゝて其こゝろを要し
がたし哥のよきあしきをもしらるべし古人の詩ハ必ず
實境に對し實事あり漫興より出たる故に其
意情實に後世の詩ハ題をまふけて作るなれバ其意
おほくハ虚偽なり是を無病呻吟と云ふ呻吟ハ
うめく也和哥も古の人ハ實意をもてよみたり後世
ハ題て讀むゆへにおほくハ虚偽の言葉を志らべて

志かげたる夜の月かげる雪をわけて梅の花さくと哥ふ
又花いとおもしろき實境に對してよめりし哥ハ情如
所見ざるをも志出せバ則こともなき事想像せる和哥
のみ也天地をうごかし鬼神をかんぜしむる事ハこの境に
ありてよく詠ずるにて志かる所以
なき世ハ人のみにてあそぶ茶のはこそいとゞ得ぬ事
なき器ハ旧を求るにあらず唯新しきと尚書にいへる
且今の茶人ハ家事にも無用なるを志らぬ旧き茶碗の

汚穢不浄にしてたとへかけ損したるを漆などにて
繕ひて用ゆるけがらはしきいふ斗なし胡乱なる人なれ
常に用ゆる唾壺の旧きを求めて抹茶を納てこれを
茶入とよぶもけがらはし竹箆を撓て匙として
茶を掬ふそれを茶杓といふ人に茶をのまするハまづ
こころみに一服なりとせめきとするに集りてくひのむも
人によれハきたなき事なれハ手自ら喰ひ自ら呑て
のこして其ふたハのそくもまつるあらひ拭て徹を既に

会ひて後迄て口すゝぎて今あるじとふつこの茶碗して
ある人にまつてまつも一ツの茶碗に點じたる茶を上座の
人まづ一服して次の人に傳ふ三人にても五人にても次第に
呑て末座なる人にのこりなくことごとく飲ほすの茶碗を上
座に納く上座の人ハそれを子細らしくめづらしき器なる
ことをほめて又次の座の人に傳ふ次座の人ても子細に
見て次第に傳えて末座にいたる末座の人へおかりてある
じに返へしある人一同に謝詞をいふして飯肴を出す茶碗

懐を包(つゝみ)次に茶入をとり次に茶入の袋をとり次に
茶碗をとるとみるべき所の下窓にあけさせて清(こい)てみる
をれよりて爐に炭をたくも子細ありせくつなあるじの炭
をおくとみる人さしよりて見て先をはさむ瓶(つるべ)に花をさせ(ば)
ほひたるは何事もあるじの志ある事をみて床の花をとりて
手形し縮(重てい)の飾りと見ゆるしかこひの作りハつらくす維摩(ゆいま)
居士が方丈の室よりも今をこしせばくして小さき窓(まど)を
あけたるのみ入れバ白昼もくらく暮ハ更にあつし

客人の出入するはそ貴賓のごとくとてくゞらせむひで
入む息こり里て参もたくざしのこゝろあるも人のはにこの
みなくむりのありにあるじハいつも心ばへせりと思はにけ
いぬおもひみうらむを張ただ今見しともせる事も
なき窓を跡しげにほむるもそらそらがし又あざさ
にて庭の作りよりもろくして潤なに飾るまで居に積り
て珍物なき事をバ遠ざけて茶人の家居ハ必ず
柱なぞをほそく障子に骨までも風にたゑぬぞかりに

細くも或ハ丸くもかくこなる程を持ながら用ひるなどにて
おもむきおかしとめて無きもおもふたしきは是の高きを
きらひて平(ひら)たしきを用ひまへて茶人のものの好きといふハ
よろしけれ何事ハまづしくやつしぬきさまどまよみびなるものぞ
茶のはじめのおこりを尋ぬるに漢土にてハ唐の陸羽の頃より茶を
飲む事を好めりといふ唐の代に至りて世に盛んに行ける盧
仝陸羽とおなじころを読めり盧仝ハ茶の歌を作りし
陸羽ハ茶経をあらはせり其ときの茶式ハ鮮湯に濡(ヒタ)し

或ハ麁茶も或ハ細末なるを抹(まつ)茶といふ熱湯に點じてのむ是も
今の茶人のもちゆる茶之類にて細末の茶を丸めを團茶と
いふそれも熱湯に點じて飲む點茶ハ茶筅を用るを今の
人のもてる業のことし陸羽ホが茶を煮しも或ハ濡(ひた)ものハ水を
えらむ事詳しく洋なる事ハ茶経に見へたり陸羽が茶をも
めでおそびしかさねハ今ハ世の茶人に似たり陸羽が同時
常伯熊といふ人も茶を嗜みて茶の徳を称(くわ)しかりける李季
卿といふ人丞相李(り)適(てき)之が子にて其頃御史大夫の官

なりしが天子の使を兼りて江南の方に往き臨懐縣といふ
所の旅舘に宿しにある人常伯熊が茶の道に達せる事
をいひしかバやがて伯熊を旅舘に請じ茶をたてさせ
けるに時伯熊黄なる衣に黒き紗の帽子を着し手に茶
器を持口に茶の名をとなへ諸人頭に囲遶して法のごとく
茶を煎じ例によりてのめるもの眉をのべて奇異の思ひを
なせり茶を煎じけれバ季卿二盃まで喫してやみぬ又より
江外といふ所に至りて又陸羽を請じて行[illegible]なるに陸
羽野服を着て茶具などを左右にもて行ふ事[illegible]ごとく
伯熊におなじ季卿茶をバ飲けれども此人をその志ざさ
見ていやしき事と思ひ[illegible]ハ從者に命して錢三十文を陸羽
にあたへしむ陸羽大にはぢ入て是より茶を毀る事を
せんとて毀茶論をつくりけるとかや我朝にてハ[illegible]の時
西山の禅僧呉国より茶を持来りて弘めしが世の人
さのミもちひてもてあそびもしなかりしに室町の公方義政
是を好ミ給ひ相阿ミに是を翫ひ東山の慈照院の銀閣

にて茶の會をこのもし　後世ハ道路を天性奢侈を好こ
あひしに茶をもてあそびすふして茶道より茶をまなむ
まて必喫茶にて茶業なることを好て人より今の世の茶人の
ごとくにあらん東山殿の調度(てうど)とて今まつよくてもとらんべし
しかるに世の茶人ハ利休居士を祖師として利休ハ佗身躰門
にて貧賤なるが草の庵のせばき内にて茶をたのしみける
を富貴の諸侯富貴の楽しさにあきて利休が貧窮を
請の楽しさをまなひ大厦高堂をすてて一間(ひとま)なる茶所をまつ
らひ其内にて手自茶を點じて人に勧めて楽しみけるを
本佗身の躰つのまづしく一間(ひとま)なる所をまなひ其内にて
手自茶を點じて人に勧めて一楽しみとなる事(こと)猶身のまづ
しくやつしき夫の楽しみとまねびたる故に一間(ひとま)作りより
始てもろもろの器物にいたるまで侘あらかなるものをとりならふ
むひおも貧窮をまなびて淡薄なるものを好む凡茶人
の為をもまぶ悪く貧窮なる夫のまねびしきとて富
貴なる人ハ貧窮なる者をまねびて一楽しみとするハいゝ

是あり貧賤なりし者其身に貧賤のうきをまぬかれて
なりしもしらんや今の世に富貴なる人おのが好むもの
貧賤なりし先祖茶に語るゝは浮ぬ事也凡万器の中に
ふるくて善(よき)物は楽器也昔此上手の作りて多くの年
を経るはたなりとも妙なる声出て稀なる事もあるに楽器
はふるくしても旧(ふる)きを宝とせて茶器の外は大かた何の器にて
旧(ふる)きは新しきに劣るこそなれ体までめでたく喰の器はいり
ては新しきを悦び衣も同じ人もしく茶具の中にても今

むかしこそ旧きを用ひ侍れ茶碗はいかにも新しきを
用ゆべきものなるに茶碗年を経たるをも知れぬ何人の口乃
垢やらんをみてけがるゝ志もかけ損じたるを悦びて
翫ぶはとても是非用ひもせでいかなる人にや昔(むかし)夜
光の璧といひしは夜は車十二乗を照したる故に世に名高く
宝とて十七の城にかへたり明月の珠といふは夜を照らし昼の
明月のごとくなりしとなりやかやうの徳ある物を宝と
して多くのあたひにかへたるほどはあるべき事也古画古墨

蹟なども宝とするも甚書畫のたぐひこの世にもすぐれたる
ものを翫び且ハ今の人のてわざを学び先の法則となるを
たのしむ故に力ある人ハ金銀をおしまず其代りをおしみなきを
求むうつけたる事しかあらず今の世此茶を翫ぶ人ハ何の
珍らしき事もなく謂れなる徳もなき者の硯箱を千金
万金に買求て上もなき宝とおもひ其せぬをもなき人の作
なる竹の筒竹の蓋置などを百金にて買て世に珍宝の
ものとおもふハ大なる惑(まどひ)也今世に茶の道を弘めし人ハ利休(りきう)

宗旦(そうたん)などが弟子ハ片桐石見守貞昌小堀遠江守政一なり
此人々ハ貴賤異(こと)なれども皆風雅に遊ぶ名の人なるに
今の茶人ハなからまで此人々の志すさまを翫びて其ハ利休の
法其ハ宗旦の法其ハ石州の法とて乱法となるがごとく一向
に堅くなりておしたがふごとくなる行儀にすぎる事今まで
あまた世にいきほひの有る人茶をもてあそび其業に溺て
新しく志ざさんにくらまる人あるさへありて嘆かしきまで
その志すさまを翫びてせむやがて一流と称するべしと定茶

のさま一定の法なき事なれども只其平生茶をたのしむ
ゆゑに人のもとめて賞翫などいへるのちに上京の抹茶を
濃く點して出す事は口にかなひて甚よろこばし但それも
廣き茶盌にてかひあるとふにまかせてかひ得たくてくま
せてのみ點心もよく合して茶をて新しき茶碗にてつ

點心ハ茶ノ子なり茶菓子なり

かふる者の點したるを人に割るる茶碗にて飲ませよし今の
世の茶の湯ハ極ていとむらしきわざなり茶を翫ぶるハ
此方乃隠居にて行るべきものの有さまなくば甚しの形なる

漆器よし銀器錫器もよし茶を掬ふには銀の茶匙
を用ゆべし茶碗ハ白みて新しきをもちゆるいさぎ
よくこゝろよし

春窓独語巻下終

春臺独語巻之三

太宰純著

俳諧ハ和歌の一體なり古今集にみえたり史記の滑稽傳の注に姚察が説をのせて滑稽ハ俳諧のごとしと云り俳諧とハたはむれごとをいひて人を悦バしめ人の心に叶をいふ也古今集にハ俳の字を誹に作れり誹の字ハ謗の字とつゞけて誹謗ハそしる義なるを俳の字にかへて用ることいかゞなどいふ事を考ふるも誹の字と俳の字と音も同じ

大に異なるべからずして本字書に見へたるを思ふに古今
集の誤なるべし古今集に載る誹諧の歌は只戯の歌の如く
まて詞もさしあたりかはるのみなりを猶こそには只戯
の歌と見るべからしくまなばざれば誹諧の姿を得がたし
連歌（れんか）といふ事中古よりはじまりて末の世に盛えし本は
三十一字の歌を二ツに分て二人してとなふるなりたとへば（この忠の）正清
院（ゐん）の御前（おんまへ）にて宇治左府ほとゝぎす名をも雲井にあぐる
かなと宣ひしに頼政弓張月のいるにまかせてとよまれしなど
是連歌之始事は上代なり其後連歌といひしは後の世に
及びて上の句下の句をいくつもつらねてながくいひのぶる事に
なりて連歌といふ名出来れり中華に聯句といふ事
ありて五言四句を一人二人宛作り人あまたにて数十句もつ
らぬる也此国の連歌は彼聯句に倣る物と見へたり歌は和
歌のさぐひ離れず歌人にて是をよまるゝは稀ゝ及て連歌師と
いふ者出来てさまざまの式法を立て遂に世の翫ひとなりぬ
近き世に及て又別に誹諧といふ事出来ていやしきなりふ

迄をつゞりて連歌のごとく永くつらねて翫びとせるが俳
諧の連歌なり是ハ初連歌師の宗連歌の句にたはふれたるの
連歌にハいひがたき戯の事を一句二句つらねて笑ひ興じ
たるをこそ俳諧師といふ夫出来て是を専にする事ハ
なまり貞徳宗因芭蕉翁などいふ先達まで貞徳
等が時の俳諧ハ義をおもしろくいひ割ておかしみのみを
先に翫ひ興ずるのミ芭蕉翁までハ猶其の躰なき夫より
かはりてハひさごかろき事といへる連中の者にて

うちやすくよろこぶべかる事をつらね極ていやしき事をきら
ひ只和字などにていひがたく俗なる事をもいひ出し俳諧
の体とはいふなりそれより後五十年のおいハ只歌仙とて
三十六句をつらね或ハ五十韻百韻とて連歌のごとくつらね
宗匠の点をうけて優劣をあらそひあらそふのみなりしに元禄
の初比より前句附といふ事始まり其法宗匠より下の句を
一句出して多くの人に上の句を付させて點者第一第二の等を定
めて甲乙の次第にあらそひて賞を行ふ其賞或ハ布帛或ハ

惣而あちこちの悪みちあを出し元禄宝永の比のかさみ
なかき悪ハ甚悪なる無理をとる付句を好んとて手取々
拙く句を出して月々に悪口をつけやまも見刻博奕乃
類と同事世に行ハれて世の俗人皆是を好む故下の句
亦上の句を除りし終むづかしさて宗匠ハ上の句の内五文字
を出して次の七文字ハ文字を請人に附させる事となる
是りそを冠附とし笠附とてかく賤しき事に成ぬ
是バかりの遊びも鄙俗と云事と成りて笠付して

農民なんと迄も翫ふに詞いよく卑しく成りて宝永の比より
冠の五文字を三ツ出して三ツ冠る各七文字を付させて
勝負をとるを知り是をこそ笠付と云是博奕に似り
又後五文字の冠とても出さず只七文字五文字の詞をも出して
只初の五文字を封して方より付句をとりて札を入し寄て其句の
あさましき勝負として金銭をとりあつかふになりぬ是に至りては
正敷博奕なれバ本の名を隠して只笠付と云ふ笠付堂
となりて卑き者いふに及バず士君子も是をなして得徳らん

ともがらはよ將に溺して多くの財をつひやし身を失ひ家を
亡(ほろぼ)せし者数をしらざれば此事上に聞えて享保の初より厳しく
三笠付を禁ぜられ法禁をおかして刑罰におこなはれしもの
其数いくらと程たへずと申す和歌の流(ながれ)の末流にて博奕
となりては住吉玉津嶋の神いかにしめさむ浅ましき
ハ誹諧の事はいはむかたなし中昔より戯によりてなる事又附の
人を嘲り笑ひて相手のさがい古き相手に詞争からん
ましく和歌するといはゞ父子兄弟の仲までとかくするいさかひさ

まる事なし近き世江戸の医師に養春といひし者相家にた
のみありしも世上謗の為あるべき事をも戯にいひちらしておか
しき事おほきのゝまで詞を用ひられやましき深なれば天罰
のがれざりしは程誹諧のさはひなるべき此比の誹諧といふ者には牧
るしば宝永五年の春京師大火にて内裏炎上し公卿殿上
人の亭宅残りなく焼失たりし時清水の大納言実業卿の家に
の参議公也(きんなり)卿も内にありて焼かしこにはけあひしが二人共に
てゆきあひ給て実業卿

風早とゆへはおもしろしといふの火や
とのみひかれは公長卿とうあくす
清水谷とてゆけいのこらむ
とこくのあひしらひやこれらかこそ真の俳諧といふ
居候也和哥の庭おもしろくたゞ世には公家の人々こそ程なれ
のやさしきたゞ世にも百はひの俳諧といふもあはさのむすひ無也
る絶のたのしき事をいはゞ連歌の詞に似て連歌にもあらず
忘紙にやあるをもちかさし侍しよりて其人におひなしとせば

俳諧は古今集にみえて和歌の一躰なりしを口に轉き庵乃
大和の哉き事を引てて庵をたゞくしても我れとて句をとゝ
付きをみせけれは何せふんなれはいとれぬ事を忘れさりぬ文字にて
書りしてあき杯の様之凡俳諧の草紙寛て節書のみ之俳諧
昨とはふ来年とはいふき夫にて諸侯其人のみて極ひものふ務なす
やんすなきくに押合はてたまゝくのよらぬ事をまたる忠
集ておさまる代ひ世に多し古君子のなとまゝくき名に非ぞころ
あらん人はきびしく禁ぜずべき事に之をそこら諸侯其人々の家き

を好むともしれざる風俗之ごとく俳諧を好む人にまさ人
といはゞ不聞

今の世俗は尓多さけに市井のたゞひとには三線といふものの
たぐひには浄瑠璃にまさる淫聲なし三絃を琉球の楽器なる
を慶長の比やらん此国へ渡りしといふむかしの阮咸の遺し
楽器を阮咸といふ世にたつかりて昔はすてあそびなりしにや
近年或は知らず今の三線は阮咸の遺制なりといふはいかに
あらんの阮咸はいかなる制にてありけん今の三線は卑しき淫聲
くにて作り琵琶に似たる物にて琵琶にくらぶれば形ちいさく
弾くにも浮きたる音にて極てみだりがはし此聲の耳に入れば人
の淫心を引起して放僻邪侈にいたらしむを害といふべきなり
士君子のゆめゆめ近づくまじき物にや浄瑠璃といふ物も三絃と
同じ比よりしとやらん小野氏の女三河の国矢はぎの宿の長者の
女（むすめ）浄瑠璃といひし其の事を十二段の草子物語に作りしを世に
此の盲（めくら）法師（ほうし）どもよみしを付て語り出せしより後の人あまた
ならひて色々の音節を作る体に作りて雅ふ本浄瑠璃（とと）か

事を演ぜしより姫なる故に於て今も名を浄るりといふ
三絃の発りもよく叶ふ故に浄るりに必三絃をあはせて
世俗の上をきゝて今しも取り能きに寛文延宝の比迄の浄
るりは皆若物語を演ぜし故に詞やさしくつゞきもなくて哀に
おかしき事は多かり淫声とはいひながら只忠孝を第一とする
を以て見ればおろかなる小人女子も是を聞ては感じあへり元禄の
比よりやゝまもなく俗に近くなりて淫声の発も多し宝永の比
京の浄るり師江戸の人気を知りける事と思ひのまゝに興じ

なるに享保の初めに又難波の浄るり師来て此ほどこなき俗調を
ひろめし故に江戸の人々深く是を好みて江戸の旧き浄るりを捨
てむさぼるに京難波の浄るりを習ふ輩若き者のみにあらず
士大夫遊侠ともに是を好みて一統に学ぶ人有故に至りて昔
物語を捨て只今の世の卑き淫奔せし事を語るを詞の鄙俚
猥褻なるはいふ事なし士大夫の学ぶべき事にあらず況婦女子に及せ
親子兄弟なども居る処にては面をそむけ耳をおほふべき事也
されば此浄るりさかりに行はれてよりは江戸の男女淫奔

まゝ其物をとならぬ元文の年に及んでハ士大夫の族ハいふに
不及賤き官人のはてまでも人の女子遊し或ハ妻をぬすまれ親戚
の中まで姦(えん)通(つう)するたぐひいくらといふ物を志らず是正(まさ)しく
淫楽のしるしといふべし三線も寛文延宝の比までハ調子ひきく
手も皆だぶまで筑紫箏に合せりうたふ唄(うた)も詞やさしく
婉しもあるやうにて俗調といひながら節おもく位ありき
近比ハ調子高くひくく手と甚せはしくこまかにうたふ
詞も卑しく拍子つゞまりていそがしきといふ計なし淫娃(いんあい)
の至極人の心を移ることを見するものなし凡雅楽ハ拍子まど
かにて緩行とゆたかなるを法とするをまなぶ之雅楽とハ正楽(せいがく)
をいふ淫楽ハ煩手にて人の心を志げくさせて今の三線好俗夫
ハ一節断皆煩手や中にも三線の煩手まさる事なし
箏(さう)ハ雅楽の器なるが筑紫箏なりて俗楽(がく)と成りたれど元
其器のもと雅音なる故にいまだ人の心をさわがさず今の
人雅楽をまなぶをおそるいとまあらバせめて筑紫箏ことをも
てあそびて雅をしるべし牧笛又ハ一節断ハ俗楽にて

頗るこれ三絃のごとくの淫聲にあらず凡俗楽のおほきなる
楽器の中に三絃ほどの淫聲なし古の鄭聲ハ必ず
なる聲なりけん孔子の鄭聲をにくむと宣て雅楽を
扶け風俗を正す故ニ世ニ雅楽有てハ鄭衛の淫聲を
禁(いましめ)せざれバ雅楽行ハれがたし今の世にハ雅楽たえてなく
して淫楽のミ盛におこなはるゝ世ハ風俗の衰弱する事甚だ
迷なり我法の古を考ふるに朝廷より民間にも其雅楽のミ
にて淫楽なかりしと見ゆ中古ニ白拍子今様(いまやう)などいふ

ものありしかども白拍子ハ今の太夫の舞子の名残なるべしと
思ふ妓女なれども古風猶のこれり今様(いまやう)ハほそびしものを一ッ
二ッ残て人のうたふを聞ニ古雅のおもむき今の世ニハたぐふ
べきもなしけれハ淫楽といふべき物ならずと聞まで
されハ俗流ニいふ三浄瑠璃やまとの有の古者の女(むすめ)浄瑠璃か
侍婢(こしもと)を集て身絃ともしハ様そ夫もかの雛ひおもわりし
有ニ雅楽を奏してつれづれをなぐさめしハ又藤(さき)ノ家(えけ)衛(ひら)
とらいまて實楽ありしは驕富のつもりくるとなぐさむべし

頼朝卿の好女千寿(せんじゆ)を進じて重衡琵琶をひかせられ
しバ千寿箏をひきて五常楽皇麞廻忽などを奏せし
といふ上りし世の風俗といひながらいとやさしくきこゆと記
事なり。まして今の世にハ諸侯貴人ゆんをなき雲の上人も
雅楽をすてゝあそびの事となく筑紫箏(こと)をだにかへりみず
唯三絃浄るりをすきて并びにあひ弾き好女を寵する而て安
楽をなさしむのみならずあまたの女僕(をんな)を畜(やしな)ひおきて夜となく
昼となくあらぬ戯をなさしめてそれをたのしみとなすたぐひ

多かり。浅ましといふ斗なし。楽記に鄭衛の音ハ乱世の音
也。桑間濮上の音ハ亡国の音なりといへるハ淫楽ハ世をみだり
国を亡(ほろぼ)すの道ある事をいへる也。今の世の好楽三絃浄瑠
璃ハ古の鄭衛桑間濮上の淫哇にも猶まさるらんとぞ思ふ
昔ハ唐の俗楽なるべし。故に大かたの世間の女子(むすめ)都乃
杯女迄も雅楽をならひしを今ハ唯俗楽をのみ知りて
やんごとなき人々も是を好みて雅楽をならふ事なし。雅楽ハ俗楽
に近く淫楽ハ俗耳にききよき故孝経に風を移し俗を易(やす)くるハ楽

より善(よき)ハなしといへり然るに風俗をうつしかへてよくするハ雅楽の
功なるを以て風俗をうつしかへて悪くするハ又甚しきなれハ
たとひ雅楽世に行ハるゝとも淫楽を禁せされハ雅楽もまた廃る
やすし孔子の鄭声を悪むと宣ひしハ此れなり今の世
にハ雅楽絶て形なくして淫楽のミさかりなる故に士民の風
俗年にしたかひてあしくなるをとゝむるのけハしき道をしるが
ごし貞享より元禄の初までの人の風俗を思ひ出して今
の人の有様を見れハ衣冠ある人のかたハらに赤裸なる人
を見るがごし五十年の間にかくばかりの変化あるハいかなる
事ぞや全く是淫楽の盛なる故也三絃浄るりハ昔より
淫声にて百年ばかりこのかたなれども貞享の頃ハ三絃
も今のごとくの類なるにあらす浄るりも猶昔語にて
詞少なかりしに元禄此上るりあやつり出来て是迄と
らしと巧まちらふ種々さまくの妙曲を作り出して人
の聴を悦(よろこバ)しむ浄るりも俗なるき鄙俚猥褻なるより
を語る故に今にいたりてハ詞極て卑しく淫声いやま

さりとておもんみる人は常に志のびかくる事をおほふ者を面
白く思ひて楽しむ浅ましき世の風俗也昔なきかしの
事の出来ぬるは諸子百家の大病也除かざればあるべく
されたとへ御禁止せんとも三線浄るりをば非人の
不作法にて座敷に上げぬものとせむ士君子はおのづから
是をみてあそばざるべし是風俗を正しくする一つの原なり
胡弓（こきう）といふものは三線の類なるまでも業にて平なる
にや好む者もなし只めくら法師非人の不作法にて
やさしきは風俗をやぶるほどの事なし

春臺獨語巻之二終

春臺獨語巻四

太宰純著

箏ハ元楽器にて管絃のうちに入りし物なりけん一二百年の昔公家の人筑紫に流されて配所のつれ〳〵に箏の手を作りて弾ならし雅楽の越天楽（ゑてんらく）の譜を述て歌をうたひてそれに箏をあはせてひきしを筑紫の善導寺の僧を曲をならひ伝て弘めしよりつくし箏と号て世にはやりてあそびしとなりしとかや其後八橋検校といふ盲法師此曲を

おもひ給ふ上手なりしかバ越天楽の始といふも箏の名也と云
事をなくして色々の事を諸人にほどこして經と名付て毎
々の曲ありとなりしけるより末世に到りまても俗の琴とそ
なもありと聞り雅楽にハ今の細箏なく一面に六ツの緒を
かきならしを琵琶箏ハ一ツ二ツの絃を略して細にたえけき
あるに世俗の耳に面白く聞てことと思ふなと大繁くに成
淫し陰声なといふ箏となれバ雅楽に陰声を出して
琴琵琶といふへき也なり 越天楽の事ハ雅楽なるをのべて琉

紫竹箏の事とても世ハ淫声を嫌ひ雅楽ましく父子兄弟の
中にても呼悪くならず位有人の家にても婦女の中に琴
てハ淫声をきゝものゝ害になし三絃を淫て淫なりと誹
まふゆるハあり呼ずまき俗箏まても絃声の艶ひ甚く唄も
のになりしといふ今ハ多くの人もこのみて弾ハ淫して禄去
ハ二たびかくなるに越てもきゝたれせむ江戸の内をひ移りあるを
まてに箏の事を演に呼ずむ只三絃の事のみ街にちてが
まびすしされハ盲法師にて瞽女にて箏淫共に盲人に一人之

風俗の衰へて拙くなる凡此たぐひ也

一 猿楽といふものハ玄宗皇帝が梨園といふ座列往来に起りたれハ
頼家の鎌倉家の時より有しと見へしハ滅戯なりしといふ事也
なれバ今の世此猿楽ハ室町の時より始れりといふや竹田の八郎
恭の義持と云者此戯をなし始るといふ義持ハ今猿楽師の
今春大夫の先祖也室町の公方鹿園院殿より武家まで
天下を治めしより古より有来公家の礼楽を捨て別小礼楽
を作る礼ハ今川左京大夫氏和小笠原右京介長秀伊勢

武花ち満たる人命をさえてそれを論定も楽ハ別猿楽之
事今これを今の世まで迄これを武家の礼楽として用ひてあり
ただして武家の礼ハ治世の俗礼之猿楽ハ俗楽之猿楽の音
いかさまる声之鼓うちまの口をそろへてさけび怒る様之孔子の
作られし小部教化の声といふものもなく今の武士こハなり
たる衣服を着て左を行まる膊腿をあらハし肩をそびやかし臂を
はりていかめしくするまで雅かなく俗楽之但猿楽ハ淫声
なるを今人の心をとらかしそれの他の俗楽にまさりたるは

誹諧子ハ死せる先幽冥に至て獄にあひて弟ひきた安楽
業をめつし仏果を得ると多く作れり幽冥にありされた大方
仏道(ふつとう)を宗とせる縁なれに世のならひなきを志めて今
菩提(ほたい)をまぬかれんなきハおしえを忘れたる人多くハ俳諧也
之武家に誹楽を玩ハ者のるすにハせもあるべきゆへ文の宴会
にもを用も心得かくし酒を進るにつきて三詞の三事に叶へる
一ッしをうたふハ賓主の情とのぶる足ざるなれバ中華の古人
詩を賦せしに新まべし誹楽をとるせハ幽冥のあり小まで

弔ひをみるさへ又世の業者を志すあるとえらなく出しき
ることをうたふハ旨て義を忌(いミ)しなば只只哥も歎きてたやし
なそく笑ふるなきるを目出たることの心あひていはんきまんつかふるハ
見ゆるなる湊(みなと)検校と云し盲(めくら)法師雅楽をとるのみしる学
は事をおひて笑ひあり又武家の貴(なりとき)誹楽のうたぬあをおひて
一躰をうたふ事ハせめての事とこそ余他を学びて誹楽師おほよ
ぢりて色くのまきをなして笑ふるでもあるハ有べき事と
思ハをれ呉にて後唐の荘(そう)宗と云し天子俳優を好て

自らその不徳を知てたのしまざりしが故なり天下を失ひける
五代史に見えたり俳優は今の狂言之古君子の賤しむる事也昔
平家の白拍子を好玉ひし妓王妓女仏などいふ白拍子を召て
寵せしの事之宮女なを男子を習せたる事邪淫の本種となるが
田楽を好しも自ら其不仁を知りたる事は知れ今の世には其人
なき人は猿楽を好む故其は必自ら其不徳を知りして
楽しことは昔の人さへ其の風俗の正しからざる世の有様之
前代旧事本記といふ事は大成経といふ道き比世の古老

ありて聖徳太子に関る事本記の名を盗て偽作せし者也世に其
出る事ぞまらさ清いたしよりあさ猶其子云を出せり其伴ふ猿楽と
神代に猿女といふ夫より始り聖徳太子の時世六十六番の猿楽有 白翁
黒翁といふ者始兄鼓弟鼓といふを加ぬる事と云はるせり
大成経は世を誣るといふ事是之而りの書を見て猿楽は往古
今時まで有事ぞと思ひて大きに惑之南都の春日祭まいで
其の古より猿楽を好し 内裏にてもさき世には猿楽を停
諺ある事如何成らん然るに今人は好まぬる事之世に古を

好む人常なるにかはりの事をもてあそびて流俗に随ふもあら
なき事なれ不仁の行よりと思ひて其徳にわするゝなるべし
人生立て赤子の時ハ啼く声を出し二三才より詞をあはせて
叫呼して己が志を人におぼへさせんとなく歌謡をまなびて
うたふこと常をなべての人の為る事皆自然之人として声を
出して湮鬱を宣る事なくてあらぬ故之されバ人ハ何にても
歌声をたる事をおもくるまでいはぬ天性之順事好事必ず
楽を文にかけて其れ詞を立るハ好むものを為ざるよりと徐き其の

力まかせに声を立て励ハ情の鬱之気を揺蕩すれバ必鄙俗に流
れてハ淫声のけしからぬまになるを古の聖人おもんばかりたまひ志
めて楽といふ事を作りまして諷舞絲竹鼓の類をもて人心をなぐ
さめ湮鬱とてこもる心気宜揚発越せしめあふ其の中ハ志づら
くもて和平の音にて催馬楽といふハ賞する手あるをおしすらふ家なる
を取上て是を絲竹にあはせて朝廷の神事にも宴にも用らる
我朝のうたい物の始とぞや是之が古代日記にかけるをなん
のこりに

其の時まて其節をハなく入ちゆきまて今をときめく
つむぐるなをたやくまゐるらん声しと明らかならんや
よむ座のうれねもなせまこハむそらをとしてをき。
此りまさをして後もまてこずおのまくたこそ
といへるがごとく昔ハ神楽の歌も詞やさしくやはらかなりぞまた
より後ハ朗詠何りて雲の上人のなぐさミ又ハ浄瑠今やうの
おこりて流布し松の葉を撰しける事もいふもなく
歩ひて今の世までハ跡方もなくなれり白拍子の舞の詞ハ平

家物語抄子かし語り候も詞やさしくやはらかにて琵琶法
師の平家物語ハ天台の声明の入しよりして生仏といふ盲法師
そのかミ生れ付の声にて語り始けるといふ今の世迄語る詞ハ元より
平家物語なれバいふにおよばず昔のならひなればやさしくやすらかにて
琵琶をあはせれバその節も流れて琵琶人まで様なし謡曲
の謡の田楽などハいかなるうらミある古けん今の世まで流布しより
かりてハ猿楽とともに世々幸若の舞といふ事の宮所の舞とや
桃井氏の子孫に幸若丸の山の児にて幸若麿といふ大夫語始ける

とく伴ふ琵琶法師の物語に似たる処ハ右猿楽のうたひに
似たる所もあれどいづれにても少しも淫聲なき者とハいへど
絶て此事なく只扇にて手を打拍子をとるのミ也詞ハ定ま
りたる物有て皆昔物語をのぶるのミ新しき事をバ作り出さず
士大夫の中にてもあそびてハ淫使を進る謡なり寛文延宝の
頃ハ浪々人の家居にても是を用て心をなぐさむるをとめ
ありし縁の時より猿楽さかりにて老若の者世に悦ぶより説経
と云ものも出来て法師の中に説経師と云者ありて佛法のたふとき
る事を語りつゞり浮世のありさまの哀に悲しき物語を語りて善悪
因果の報ひある事なども物語に作りそれに節をつけて哀れなる語りて
聞し鉦鼓をならして拍子をとり世の婦女子に聞せて悪をいましめ
善を進て菩提心を発しめんとせしなり昔より法師の説経に因縁
物語あるたぐひを物語ハ佛説にまかせて臨みなぬ事も交れ
る詞ハ昔の語りにて卑しき俗語をまじへたる中に哀しき事多く
あらぶまでも上下老若の者の詞のごとく昔より定まれる物ありて
いつも古き事のミを語りて今の世の新しき事を作り出さゞりしに聲し

只悲しき声のみなれば婦女児を中てはそゞろに涙をながしけるなり
また浄るりのごとくの淫哇にはあらずして三絃有てよりこのかたは三絃
をあはすゆへ弦歌をうたふよりしかし浄るりも流れ一変しき
淫哇にながれいにしへの哀傷といふ声ゝ浄るりにならべては
かしましき方ならん盲法師婦女などのうたふ一節寛文延
宝の頃まではもてあそびけるなどいふ曲有て俗謡なんどをはやさ
しくおしもゆるやかにいとたいらかにきこえしなどいふは詞やさ
しく上手人の耳にてもうれしくてはやりくるまで昔の今様にし

かし似たりき俗中の雅といふべきにや是も三絃先にあはする時は
調子ひきくして音楽まで呼子の耳にかしましからずつくしの箏と
全き様にて聞しげなくおもりき今は盲法師昔の曲をばいさゝ
かのこるにて調子高くかしましき事のみをこのみて三絃いろいろかくの
ごとく物あそびとおもへりうとふおもしろさばかりしくやさしうかしましき
のみみて昔のやうなやさしき事は露斗もなくて纔ばかり一生の内
五十年の間に俗楽さへかく早く物かはりて今をめずらしき事や浄
るりは江戸雅俗のことにかはりは乱れ田舎までこの比の風有て

一　始りハさまて古き事にもあらず江戸の浄るりハ半太夫河東家の
好ミあそばせらる故子細も始ハいさぎよき事にてつよき音京難
波の浄るりハ声出しくわひてよはけ有る元禄より以前ハ
仕方の浄るりも皆昔物語なりし故子細がさのミ音曲に
江戸ハ口きゝの世の形気事を語り出せる故子細に京帝しく浴
殊更なりしかし土地の風俗にならぬ江戸の人京難波の浄るり
をきゝてハ肌をさむけ耳をおほひてきくべき事とハせざりしに
宝永の比より京都にて一中といふ浄るり師出て京の浄るり

を弘めしが江戸の人やさしきを悦びあへりしに享保の頃ミ難波
より竹本といふ浄るり師出て難波の浄るり江戸の人気に移し
難波の浄るりを好ミあへりしに又京都宮古路といふ浄るり師
難波より出て出しき声にて弾き流を浄るり古き乱したる事を
を語出し江戸の人又是にうつりて興じあへてそれをまねる
頃なし下ざまの人ハ申すに及ばず歌舞伎芝居の上なりなんど
若き人までもさしもの気を好みて出来の初めてめ出生無事あり
月出るれ稀まれあへる者あとてハあまりに出しき声まで

うたひもの事なとを綴つゞるをおのれとするいまの世は風国を
荒し候をあらして中あたり浄るり師音曲師などの徒を申さく
浄ましくみるに古君子のまても平かならぬ人なり一ふしをかたてたれ
やうなるものまて彼白でもなく頼み上て往来者とるや此節
是まては江戸の人ひとくに京都はの浄るりのみを聴て江戸
の浄るりをは又やくさけねとせて風俗は民の好悪に左右して
移りかはるあなかれ近藤年の内は江戸の人のこと〳〵くこひを
果のとうたるを取るは他の様にあらすそ全く淫楽の力なり雅

楽の風俗を悪くするよりは淫楽の風俗を好くするはちかき
しむるなるや之和漢古今の俗楽の中に今の三絃浄るり程
の淫声はなかるへきとハ見ゆれとも世の末といへなる所以なり
風俗なりけるも

漢土にて俳優と云ふハ今和国の狂言師之戯云を云て人を
笑ハするを俳と云ふ優ハ則狂言師之俳優侏儒と云ハ人の
身にたけ短きを侏儒と云たけ短きのハ事拍て舞踊を能くすを
俳優ハ多く侏儒也昔春秋の世に魯の定公と斉の景公と交

谷と云処にて会盟せられしに孔子魯の大司寇の官にて定公の為
に相となりて行れしに会未る宴饗のついでに斉の方々俳優侏
儒を出て戯舞をなさしめしかば孔子是をとがめ給ひて先王の法に
匹夫諸侯をまどはすものは罪にあたるべしと述給ひて司馬に命じ
て切らしめ給へり唐人の詩に一悟世人取笑はば古へ有優旃優
孟などといひし者皆此類之唐の代には梨園の子弟と呼ぶ者俳
優之宋元の代より雑劇と云和則俳優の不祀之雑劇は全く此方の
今の狂言之義子と呼物の此方の能狂言之雑劇を訳る事を

棚屋と云此方の操芝居は今の猿楽もことに中華の雑劇には国家の法禁
ありて男女淫奔などの趣向にて世の風俗に害有事をなさしめず
只君臣父子夫婦などの風俗を励ますべき事をなさしむ若此
掟に背く者あれば刑罪を行ふ是国家の政也我国には此制禁
なき故に何りも女の戯子も男女の色恋を演て欲心をほしいままに
或は淫奔して身を失ひ家を亡したる者の事をまねびてひた
すら淫佚を飾る事をなして男女の居処は云に及ばず年若け
なる者も是を見ては面白き事の限と思ひ善事をも倶しなむ

雲雀に鶴ぶ鶴にむさなき者も昔より夫婦の智恵なくて家なき程に
りこてなる物云ふ人のたまいより出ずる町から身のよそおひ衣裳
調ひなまでもよく肥え身ちてそやと手結びりそめにより合て物語
まるも雲雀のおかしかりし事をいふて女のかこつらにようとおもふ
をはじめあしきと思へむたし思ふ人のきらひすてながらにならぬ
福に像にいひりと鉦して主むあつく粉むらある女などもそ
云まぎらハさせその者をさきをさるもあり此事きものの心かく
あるにあらで士君子の家よきへんくれこそたゞ口多し人の風俗の

日毎にありく事なるもしらで此事より出ると合点ある
とも宜なり

春雪物語巻四終

春臺獨語巻五

太宰純著

又異國にては士農工商の四ツをまさをとして世をまもる者を平民といひ戯子の類をば総て賤人と名づけて平民の類の外なる者とし籍貫をわけてそのみは申し先きらふ事我國の穢多のごとしされば平民の貧きものも子を賤人と婚姻を通ぜんことなし國家の大禁にて是を犯せば刑罰ありて平民と賤人と籍を混ぜしむまじき為也然るに本朝にては野郎俳優などと

様々の紛れより定めおかるゝといへども世の人修が技藝を党むるにか
修むるを治むる事を恥ぢ修らは家宿て銘の内に於住居し要
術をきらのミあらぬ倫例にて家よみ詩作り学問せる者多く
ありとせバまして世間のあやまる事何の勝かあらん何かつくなるらん
人の権唯を知り人の心に入る事極て了これなバ彼の人々にあいてハ
うけまけとさるとありされハいつとなく此業に任せて士君子も
まじなれバ術き者と知りなバ士君子も猶浮あれおりりまれ
銘の内に宅地求て商などして要馬となりても多し法便に在

まで修練ありし士に於て有人々を見ゆてハ其た是を
べし家の法禁ありきれに非人を以て人衆に混せる道に痛
ましき世の有様を嘆き昔ハ学ぶ者百年の前とハかゝる事
ハなかりしと古き人いへり我父ハ寛永の中比に生まれて八十余歳
にして享保の中比に終まり　大猷院殿　厳有院殿の
御世を歴て元禄の年々を慕ひ語りつれバ我おさなきより
能覚て耳に留めせり我ハ延宝の終の年に生れて
常憲院殿の御世よりけふまでしく此身に歴つるハ其雅

のけより其まで五十余年の事をば目に見しか父の語り聞せ
つると我まのあたり見つるを思ひつゞくれば百年の世変歴々
として目の前に昔がたりし人と成侍るつゐでに昔の事をも
忘れして或はうらみ或はなげき且は治まる御世にむまれて
干戈のうごきを知らずまた長く静謐に経て嬉しきうへにて
略し養生事を経ひ且は事ありし時にあたりて猛虎
も嵐と成宝銀も紙と成事をいはざるにかくて此世の治る事
久しきによりて上より下までこゝろゆるしひとへに驕奢のみを

いとなむ故に旧き事はおかしかはもなりて新き事を珍らしみ
ともてあそび能き人の忠業すたりもめで衣服器財
家作まで昔にかはりぬればまして人皆種々の驕或は栄宴
のたのしみ移新の事尤年々に出来て旧き事はいつとなく
忘られたる大なるきるみは能き事多くあらぶし旧事には
能事すくなく新しき風俗のうつりかはれる目の前に歴ぬるを
此に昔と今とを見くらべ思ふ事多かりしところに冠を
くつにもさき沓を冠にきるがごとくなる事侍る二三も不思議なる事侍らく

と百年はかりの風俗を思ひくらぶるに領承の事どもハ氣して
江戸の人の風俗とても殊に昔にかはりぬれば我ら若き比のほどは
昔長えれの比生れたる老男女も昔にて寛永の頃を半
のさかりと称うりと云に男ハ寛文の華の方みは華の勝と花麗
とし女ハ延寳の華の風俗をさかりとよきけさひとせりと咄ふ
其風俗ハ家おさゝめ時も腰りてまし婦女の帯ハ金襴を
真紅の縁として花びらに模様美をとゝろへに縫付て先を
腰の下の帯とさげて腰先しなり広さを僕に鯨尺

弘寸むかりをんして締めどいふ事なし四月より八月迄
婦女の礼装抹締まて広き鯨尺の八分斗なるをうしろに
結てたるをとつけ帯と呼ぶ今のつけ帯ハ昔の広の帯より
広く今の人ハ昔のあるを認れば見るも思ひて変風俗と
せん此年に我がまゝのおとり見えたる事にて詐に非ぞし旧き
事知らる人なるハ殊とも云しまべて男女の衣服帯ハ極て
質素なりき男にても女にても十四七歳をは世き袖を高
る事昔ハ鯨尺一尺七寸を極とせし小貞享の比よりまへ

斗にちかみより漸々ましく長く成也今ハ二尺四五寸まで
引のばしたる也婦女の帯も貞享元禄の比より漸く広く
なりて今ハ鯨尺にて八九寸に及べり綿を少して褌のごとく
男の肩衣よりも広き也昔ハ麻の幅鯨尺の八寸斗なれバ貞享元
禄の比より幅一尺余に及べり宝永の比迄ハ婦女細き麻縄
にて髪をつかねて其上を黒き絹にて巻けるに麻縄を
やめて紙にて結ふ細糸をより紙縒にて元結ことといふ
物を造り出して海内の婦女皆是を用ひしより結ぶ

出るしやこぬと段文まさしく見えて流行せり今
の人噂てハ傍とせば凡男女の髪ハたち系まがえん及びてより
こみちも常かもりまちん今ハ昔のうてのこらず昔此
婦人ハ髪かさく長きたけよ女子などいひてほむるなり
近きころハ髪なかうみじかきをよしとする風俗となり鬘
多き女ハ髪の内を剃りて或ハ切りて長くするにて此風俗ハ
京の婦女より始まれり江戸にて今ハ此の男女の
風俗頭つきの名まで昔ハ京に似るまま実ハ京都ハ

公家の外工商沽のことなれバ人の柔懦にて利にかしこく
江戸ハ武家の都なれバあづまゑびすの人粗暴にして利にうと
く然るに近年の方ハ江戸の人京の風俗をまねぶなり
武士の外ハ昔より今も唯京の婦女の常より美衣する
のミを好みて江戸よりうつりて後江戸の妓女なども出て昔の
まねをして黒き繻子にて頭面をつゝみ目計をあらハしけるが
天保に至て頭面を包ことハ禁止なり宝永の頃之き
今ハちいさき手ぬぐいを頭上にいたゞきたるのミにて面をバ

あらハしてむき出なる様にて顔をかくさぬもあまたありけれ
ど今ハ男ハ面をあらハして歩き女子ハけごろもハ頭笠のごとくの
うへまでかつぎ亦ハめづらしく昔の如くなる帽子を
かぶりて面をかくす者もあり其の内に覆面のごとくなるものを
はりつけて目ばかりを出して其をかくせるもあり男の女の如く
人目を忍ぶ者の多くあるにや去けごろの男ハ小袖裏を
紅にし或ハ紅の帆揚をと袖口に付て縮をも用ふ事に改め
きるもの多くみえ女ハかへりて襦の裏白き裏などを出せる
一本ノミ

めでたき事は男女訓をならふとも学ぶべし又若者は士君子よりも学
文して或は浄瑠璃を連ねし或は管絃を遊びならしかれらが
琴をば琵琶を弾じて平家物語し能囃子鼓笙尺八の舞狂
言して楽しみてあやしき三線を弾じ浄瑠璃をかたる事は只市中の
稚き者の業にてこれらは大方人を損じてたのもしにあらしむ
がし今は工人商賈の中にても甚だしきは学問し諸芸管絃
を遊びならしみだりに不為なれど猿楽をおもて楽しみさる浄瑠璃
三線なども好む人は士君子はかへりてよき事としこれを

志ちゞひさまぐ浄瑠璃三線を好てみれば家業もまておのれ
なりから家業を稚き不作法として人の顔ひと始め浮浪の士のごとに
おのれ法儀者人もはゞかり遊びしていたづら者に非を羽と席と
世をかふとせざるべし其のごとにわれらもゝの法儀者人の名をも
孟子甚なる若者等は終にはおごりを為しおのれの不作法にて終にはあ
もろもろ事を広く長くなからしめつけて人の病と物をかく
見る者かくしてみだりにしていやしくまたれる事を好む人も
有るさく行儀いやしく家業も情ぬ人でしを達る事やもある也

君子ハ温恭にしてよろづ謙遜なること能たくと万人通
行ふべき礼の大路を知りて我ひとりの道と思ひていかめしく
ゐるまじきこともなく見物んの法様をなし猛志をふり廻して其の
かつてかの禄をもなみして十人廿人の徳志をも古と思はるる斗の人ハ
只理を知りて身のほどをひきさげてよろづ謙遜なるべしと
思ふさいなくて今のひときハおごりて我より上なる人をなき
やうに思ひたかぶりて道を行ひ見をし人を下斗にし時風俗も
我いとけなき時に思ひくらぶるにはけやけくめでたくみへ侍る

づて昔ハ諸侯大夫も多くハ恭敬にして礼をつくし謙を守
ハ能てそうしたなきふるまいをせん君なる人の前に礼を厚し
詞づかひをもうやうやしくせしと我父祖より語り今ハおほくハ時風も
なくなりぬ
又昔ハ士君子の婚娶に財幣をもとむる事なかりしに今ハ
一統に侍たる程の人多く財幣をもとむることになりぬされバ
かさまの人々ハ及ばずおよぶ世の隆なることを久しきによりて人
皆侈楽して無位有禄の士より上つかた重き礼のあるべきを

社のかに鎖国して只商法をたのみて内外の事をいとなむなれ
位有人も商法を賤しめやまふる事しれば商法にて承るに
のりて士農工を下ろしめあはとる事も苦まざる風俗なり
かく中の貴賤にても私事出て私の志ならぬ夫の体まていおこが
ましく婦のまひきるたりしとも見れども中華の人往古より
男も女も髪をきる事なし五刑に及ぬほどの髪をきつることあれば
髡刑とて頭髪をそりけり佛法起りてより男女髪をそて
里て僧尼となる事ありて僧尼のかに在の人髪鬢をそる

事なかりしかるを世に韃靼の夷狄をとらいて天下の人をと
ぐく其の風俗に学て頭髪をそり髪の下を少残し組て
世へくだりて中の尾のごとくなりしを弁髪といふも中華の風俗
大変し和国も昔は中華のごとく僧尼の外は髪をそる事
なかりしはいつの頃よりか武士の体に用ひとて頂の髪を
しそ惰は髪をそり挾ませ可らし額に角をとりて頭髪を中
るて頂の毛を立りおろし髪をば指のふとさにして末を切
捨て鶏の尾などのごとくも公家の人はいまに髪をそらぬぞ

是も武家をまねびて髭をたくはへ武家も昔ハ烏帽子直垂
を着たりし故今ハ其をぬきたバ只月代をそらしてかの髪
をうしろにつかねるさへ昔の大たぶさなどと名
はけんやうになし雑組の男ハ髭をのこせるにいかゞの人ハ髭
をさくなからしぬきたバ頭髪の風俗の世よりいましめしといふ也
をき此ハ又うしろの髪の中をそりていよく髪をちゞむ
を志りのこなふぞ女も髪の多く長きをきらひて頭髪の
肉をまろくそりて髪をはさくし髪の末を切て短くまた

是また昔にかはれる風俗也若此俗まで事を論ぜバいろ
とおく女ハむかしの男のごとくにおこり男ハ今の法師などとなるべく
からんとぞ思ふされバ雑組の夷よりも見ぐるしかるべし
風俗のうつりかはるも人力にはあらずて是時運也されバ古の
聖人其世の事を慮りてよき風俗を永久になすの基き
術をまなびて己へり其術ハ何ぞといふに正楽を行
ひて淫楽を禁ずるにあり是国家を治むる政の要務
なり

春臺獨語巻五大尾